

森のイベント VII オペラ「白墨の輪」のゲネプロを観よう報告

日時 2013年3月30日(土) 15時開演
場所 オペラシアターこんにゃく座 Aスタジオ (JR南武線「久地」または「宿河原」)
会費 わかもの 無料
保護者 2,000円以上
森のサポーター 1,000円以上

* ゲネプロは入場料無料ですが、こんにゃく座へのお礼と“森のわかもの支援室”立ち上げのための基金としました。

参加者 24名

わかもの： 7名
保護者： 9名
森のサポーター： 8名

今回は趣向を変えて、オペラシアターこんにゃく座オペラ塾1期生と2期生による発表会のゲネプロを「こんにゃく座」のご好意により“森のイベント”として行いました。そして終演後“こんにゃく座代表・作曲家の萩京子氏と副代表・歌役者の大石哲史氏にお話を伺いました。

演目はブレヒト原作・廣渡常敏台本・林光作曲「白墨の輪」

上演時間： 約2時間半

出演：塾生17名(森安恵を含む)＋こんにゃく座々員3名・ピアニスト：井口真由子

演出：大石哲史・音楽監督：萩京子

註1：オペラシアターこんにゃく座 - [新しい日本のオペラの創造と普及]を目的に掲げ、自国語のオペラ作品をレパートリーとし、恒常的にオペラを上演する専門のオペラ劇団として1971年に創立された。よく聞き取れる、すなわち内容の伝わる歌唱表現を獲得することを、創立当初からの目的とし、その成果は各方面から評価を得ている。

註2：ゲネプロ - 演劇・オペラ・バレエなどで、初日の前日に本番どおりに行う総稽古(通し稽古)

ごく大雑把なあらすじ(もう少し詳しいあらすじを知りたい方は「コーカサスの白墨の輪」をネットで検索してください)： 都で反乱がおこり領主の首が切られた夜。台所女中のグルシェは領主夫人が置き去りにした赤ん坊のミヘルを連れて逃げる。やがて反乱は平定され、奥方はなき夫の領地と財産を手に入れるため、見捨てた子どもが必要になる。

自分こそ母親であると主張する二人の女：女中のグルシェと領主夫人。民衆に祭り上げられた偽裁判官アツダクは白墨で輪を描かせ、その中央に子どもを立たせ、両手をグルシェと領主夫人に引かせる。さてその裁判の成り行きは・・・



みなさん面白かった・楽しかったと言ってくださいました。

以下にみなさんの感想を羅列します：

- －これは“大岡裁き”といった方が何人かいました。
- －元来オペラ部門は敬遠気味の分野だが、どういう訳か、ずっと聴き終わりました。出演者がみんな楽しく歌っていたからだと思う。うまい・へたは勿論ありますが、新鮮さとピーと張った緊張感の心よさだったと思う。
- －導入部から面白く、引き込まれた。
- －舞台をベンチで場面転換したのがよかった。舞台装置ちゃちな感じなかった。
- －グルシェを何人かで演じたが衣装 - ポンチョの引継ぎで分かり易く、違和感なかった。
- －統率が取れていて想像以上にすごかった。
- －スポットライトを浴びてないひと演技していて、驚くところはちゃんと驚いていた。
- －演者の真剣さが伝わってきて、違和感なかった。
- －兵士のだぶだぶの衣装コミカルで面白かった。
- －領主夫人素晴らしかった、見るだけで絵になっていた。
- －最後のグルシェの迫力すごく、泣いてしまった。
- －ルドウィカの衣装を後ろの棚に掛けたのは面白かった。
- －医者のもやとり面白かった。

ーピアノが上手だった。2時間以上引き詰めすごいと思った。

ースポットライトで白墨の輪を表現したのはわかり易かった。

ー偶然だが、自分に問いかけてられているような内容を言葉ではなく、オペラを通して伝えるというのは説得力があった。

ー身近に感じられたオペラで楽しかった。

ーモリのバイタリティー・エネルギーに感動した。あの音質の声の人はあまりいないのでは……。モリがでてくると楽しくなって面白かった（モリのクライアントとサポーターの判官びいきですね）

ー最後に“森のサポーター”氏の長文の感想を：
大変良いものを見せていただきました。

ー一番気になったのがストーリーです。えっ、まさか大岡裁き、やるの、やらないよね……。落ちは違うんだよね。とか思ってみていたらやっぱり大岡裁きでした。

わかっていても感動しました。

ストーリーに一工夫あってもいいのでは、というのを感想にしようと思っていたのですが、原作があるようなので調べてみると、ブレヒトという人は、マルクスを学習した人なのですね。劇作家の前は、劇の評論家であったようですから、他人のパクリはやらないと思いました。となると……。ユングの神話を思い出します。集合意識ですね。ユングの書いた曼荼羅と仏教の曼荼羅は似ています。

たぶん調べれば大岡裁きと似た話はほかの地方にもあるのでしょうか。

この件は、私の中では解決しましたが、ほかに印象に残ったのは「この子が金の靴を履いたら、それで私たちを踏みつけるようになる」というところですが、確かにこれは強い動機になります。

そのような人間になって欲しくないという願望もよくわかり、この物語の核心だと思います。よい発想です。

ただ、私は、この子が金の靴を履かなくても、誰か他の人が履いてしまうということです。だったら、条件を出して、この子を領主にしてよい政治を行うのも一法かと思いました。それが、「せめて、この子が言葉を話せるようになるまで」というせりふでしょう。言葉と共に思考の根源を伝えておけば、自力でよい政治とは何かを考えられるようになる可能性がありますから。

最後の自動車はよき人に運転して欲しいというのがあったと思いますが、今までの私の抱えている仕事の矛盾ですね。原子力って元は、原子爆弾と同じ原理ですから。よい原子爆弾とか、良い原子爆弾の使い方、なんてものがあるかどうか。私はお金のため、自分の科学の知識を生かして原子力施設の安全審査をやっていますが、仕事には常に違和感があります。さっきの金の靴と同じで私がやらなくても別の人でもできます。ドイツより先に原子爆弾を開発するようにアメリカ大統領に進言したアインシュタインの後悔と似ています